

No.475

 ざっそう つよ
雑草メヒシバ、強さのヒミツ


メヒシバは、春から夏にかけて^{はつが}発芽し、夏から秋に実をつけて^か枯れる一年草です。日当たりの良い畑や花壇^{かたん}、田んぼのあぜ道などにごく普通に生え、草刈りしてもなかなか^た絶えない、強い雑草です。その強さのヒミツを見ていきましょう。

■強さのヒミツ、その1

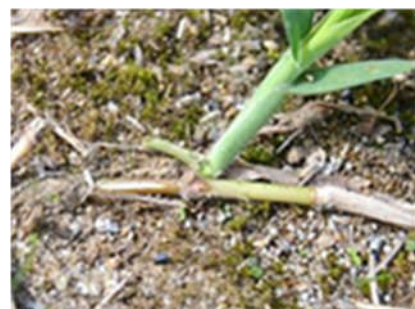
去年の秋、科学博物館横の公園で、高さ5mほどのクロマツが一本、^{ねがえ}根返り状態になって倒れました。倒木はすぐに片付けられ、地面に^あいた穴も新しい畑のようにきれいに整えられました。そして今年の夏、そこに大量のメヒシバが生えてきたのです。



これは、土の中で何年間も眠っていたメヒシバの^{しゅし}種子が、地表に出て強い光を浴びたり、温められたりしたことで、いっせいに発芽したものだと考えられます。メヒシバは‘その時’が来るのを土の中で待つことが出来る強さを持っています。

■ヒミツ、その2

メヒシバは、刈られてもすぐに復活します。これは、新芽を作る部分が地面の近くにあることで、新芽を刈られずにすみ、そこからすぐに再生できるためです。



新芽を出す茎は地面をはっている

■ヒミツ、その3

7月末、公園にあったメヒシバを並べてみました。

大きく育ってたくさんの穂をつけたものや、小さくて少しの穂をつけたものなど、穂をつけた株のサイズは変化に富んでいました。小さい株は、つい数日前に発芽したものでしょう。大きくなるか小さくなるかは、種子の時にはおおかた決まっているようです。

■確実に子孫を残す

いつなんどき、刈りとられてしまうか分からない^{かんきょう}環境では、土の中で^{きゅうみん}休眠するものや大きく育つもの、早く実をつけるもの

など、いろいろな性質の種子をまいておけば、^{しょうらい}将来きっと、どれかが当たるはず。メヒシバはこのようにして、子孫を残す^{かくじつせい}確実性を高めて、雑草として生き続けているのです。



穂をつけているメヒシバの大きさ。左上は種子(長さ1.8mm)

(太田道人)